HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 文体混用に関する一考察・その2 ： 「です・ます」体の「だ・である」体への混用について |
| Author(s) | 中村, 重穂 |
| Citation | 北海道大学留学生センター紀要, 16, 71-92 |
| Issue Date | 2012-12 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/52698 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | JISC16_003.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第16号　(2012) [研究論文]

# 文体混用に関する一考察・その２

## —「です・ます」体の「だ・である」体への混用について —

中　村　重　穂


### 要　旨

小論は、文体混用のうち、「だ・である」体が基調の文章に「です・ます」体が混用される事例を取り上げ、その機能的分類と談話形態を考察したものである。考察の結果、「です・ます」体の混用は、基本的に作品の登場人物「私」の指向性を表し、その指向性は、作品内世界に於ける「私」の“反応”であることが明らかとなった。また、その指向性の６割強は他者に向けられており、作品内世界で「私」と他者を緊密に結びつけ、作品内世界に関係性を構築する働きがあることも明らかとなった。さらに、「です・ます」体の前文の機能・含意を考察した結果、「です・ます」体は、作品の外部の世界にも関係性を作る働きを有し、作者と読者の協働的な活動を形成することも看取された。以上から「です・ます」体が「だ・である」体に混入する混用は、「だ・である」体が「です・ます」体に混入する混用とは、異なった性質・特徴を持つものであるということが判明した。


〔キーワード〕混用、「です・ます」体、「だ・である」体

## 1.　問題の所在

筆者は、中村（2011）に於いて、日本語の文章の文末文体の混用、特に「です・ます」体の文章中に「だ・である」体が混入する現象について考察し、５点の知見を明らかにした。しかしながら、混用のもう一つの現象である、「だ・である」体の文章中に「です・ます」体が混入する事例については取り上げることができず、その考察は他日の機会とした。小論は、これを承けて、「だ・である」体の文章中に「です・ます」体が混入する事例を取り上げ、その分析と考察を試みるものである。

## 2. 先行研究の再検討

すでに中村（2011）に於いて、混用を取り扱った先行研究を概観したので、小論では総括的に再論することは控えるが、以下の論述が言及するものとして、野田（1998）とメイナード（2000）を若干再検討しておきたい。

野田（1998：97）は、「です・ます」体の混用を、「中立調の文章・談話」への「ていねい形」の混用と捉え、「伝達文」と「主張文」をその典型としている。他方、メイナード（2000：340-342）は、「です・ます」体の混用が「語り手が急に語りかける相手を意識し」て発生し、そこに「語り手の存在感」を生起させることを述べ、このようなスタイルシフトが作者の「語り手と読者の距離や視点を調整する」ものであるとしている。

しかし、これらの研究、特にメイナードは、新しい知見を述べているようでありながら実は極めて常識的な結論を述べているにすぎない。「です・ます」体が丁寧さを表すことをその基本性質としている以上、「です・ます」体の混用が生じれば、そこには当然丁寧さが向けられる「他者」が意識されており、語り手が対立的に顕在化する。

しかも、メイナードの考察は、吉本ばななの２作品（『キッチン』及び『とかげ』）８用例のみを分析して情意表現の効果を結論づけているものであり、「です・ます」体の現れ方の類型的分析も（終助詞を除いて）構造的分析もない。これだけの考察は、方法論的にも不充分である上に、この程度の水準で、別の箇所〔メイナード（1991）〕で混用を日本語学習者に教えることを提唱するのは無謀の譏りを免れないものである。

これに対して、野田の考察は、多数の文献を渉猟して用例を分析しているものであって、その結論に一定の信頼を置くことができる。しかし、野田の結論である「伝達文」と「主張文」について言えば、二つの疑問を立てることができる。

一つは、「伝達文」、「主張文」と言っても書かれたものそれ自体が一つの「作品」（→ここでは文芸的作品に限定せず広い意味で用いている）として成立している以上作者が何らかの表現内容をそこに込めていることは自明であって、その意味に於いて文体や混用に拘わらず「伝達文」や「主張文」が現れるのは当たり前のことではないか、という疑問である。これは、前記のメイナードに対する批判とも重なるものである。

もう一つは、これらの「伝達文」と「主張文」はさらに幾つかの下位構造に分けられるのではないかという疑問である。およそあらゆる「作品」

が作者の何らかの表現内容から構成されているなら、そこに書かれている文は－「主張」はともかく－読者＝作品外世界の存在者にとっては「伝達文」とならざるを得ない。しかし、作品内世界に限ってみた場合には、必ずしも「伝達文」とは言い切れない事例も見ることができる。

例えば、作品内世界の語り手＝登場人物「私」の“独白”は、読者にとっては登場人物の心境を「伝達」するものであるが、作品内世界に於いては「伝達文」でも「主張文」でもない。このように、野田の混用の区分は、作品内世界の構造の観点から捉えた場合にさらに下位構造や他の区分を見出すことができるのではないかと考えることができる。

そこで、以上の先行研究の問題点を踏まえて、小論では混用という現象をより詳細に分析することを目指した。

## 3. 分析の対象と方法

小論の分析・考察にあたって混用の用例採集を行った。対象としたのは、「だ・である」体に「です・ます」体の混用が見られた小説、エッセイであり、それらの書名一覧を稿末に掲げておく。中村（2011）と同様に、100例を収集することを目標としたが、100例目が一冊の本の途中であったことから最終的に11冊から130例を段落単位で収集した。これらの用例については、稿末に【資料】として掲載する。

但し、紙幅の都合上、採集した用例を全文掲載することは不可能なため、「です・ます」体で書かれている文末部分（一部全文を含む）を「引用」欄に提示した。

付言すると、意図的ではなかったにも拘わらず、全ての資料が作品内世界に於いて一人称「私」の視点から書かれたものであった。

その上で、これらの用例を；

1）誰に向けて書かれているかという「相手」
2）「です・ます」体の文が持つ「機能・含意」
3）「です・ます」体の文の前にどのような内容の文が現れているかを観察した「前文」

の三つの観点から考察した。これらのうち、段落冒頭文で「です・ます」体が混用されている場合には、前文は無しという扱いとした。考察は、「です・ます」体が基本的に丁寧さという待遇的配慮を含むものであることから1）の「相手」によってまず用例を分類し、続いてそれらの下位区分を

2）の「機能・含意」の観点も含めて検討するという手順で進めた。また、1）「相手」のカテゴリー内部での3）「前文」の分類を行い、談話・文脈の中での「です・ます」体の出現形態の解明を試みた。

以上が分析の対象と方法である。

## 4. 分析・考察(1)ー「です・ます」体とその下位構造からー

全130例を「相手」によって分類すると、表1のようになる。

表1：「です・ます」体の相手（全体）

| 順位 | 相　　手 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 対読者 | 44 | 33.8 |
| 2 | 心内文脈内他者 | 42 | 32.3 |
| 3 | 心内対自 | 38 | 29.2 |
| 4 | 対自 | 3 | 2.3 |
| 5 | 文脈内他者発話 | 2 | 1.5 |
| 6 | 文脈内他者 | 1 | 0.8 |
|  | 総　　計 | 130 | 99.9(※) |

(※)小数点第2位四捨五入のため、合計は100%になっていない。以下の諸表も同じ。

これによると、「対読者」(33.8%)、「心内文脈内他者」(32.3%)、「心内対自」(29.2%) の順序で殆どを占め、「心内対自」に「対自」(2.3%) を加えると95%以上を占めることが分かる。と同時に、これらの「対読者」、「心内文脈内他者」、「心内対自」＋「対自」の間には、殆ど差がないことも分かる。この場合の「心内」とは、作品内世界で作者あるいは登場人物「私」が相手に向かって明確に発話しないこと、あるいは相手がいない場面で自身の内部で発話していることを表している。

ここから考えられることは、「だ・である」体の文章への「です・ます」対の混用は、他者言及的か自己言及的か、のいずれかの指向性にほぼ分けられるということである。そして、このことは、メイナードが言うような、読者に語り手の存在を意識させることだけでなく、それ以上の比率で作品内世界での作者の語る意識の指向性が顕在しているということを示している。勿論、それら自体も、小説・エッセイとして書かれている以上、作者が読者に伝えようとする活動の一部ではあるが、それらが語り手を意識させるというよりも作品内世界での登場人物「私」と「他者」との関係性を明示する効果を表すものであると筆者は考える。

このことは、個々のカテゴリーの「機能・含意」を分析してみるとさら

に明確になる。上述の「対読者」の「機能・含意」を表２、「心内文脈内他者」の「機能・含意」を表３、「心内対自」の「機能・含意」を表４にそれぞれ表してみる。

表２：「対読者」の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 同意要求 | １６ | ３６．４ |
| 2 | 註釈 | １０ | ２２．７ |
| 3 | 説明 | 6 | １３．６ |
| 4 | 依頼 | 4 | ９．１ |
| 5 | 提案 | 2 | ４．５ |
| 5 | 問いかけ | 2 | ４．５ |
| 7 | 主張 | 1 | ２．３ |
| 7 | 謝罪 | 1 | ２．３ |
| 7 | 助言・忠告 | 1 | ２．３ |
| 7 | 注意喚起 | 1 | ２．３ |
| | 総　　計 | ４４ | １００．０ |

表３：「心内文脈内他者」の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 説明 | 6 | １４．３ |
| 2 | 非難 | 5 | １１．９ |
| 2 | 依頼 | 5 | １１．９ |
| 4 | 同意要求 | 4 | ９．５ |
| 4 | 提案 | 4 | ９．５ |
| 6 | 主張 | 3 | ７．１ |
| 7 | 疑問 | 2 | ４．８ |
| 7 | 問いかけ | 2 | ４．８ |
| 7 | 独白 | 2 | ４．８ |
| 7 | 結論 | 2 | ４．８ |
| 7 | 意志 | 2 | ４．８ |
| 12 | 註釈 | 1 | ２．４ |
| 12 | 自己納得 | 1 | ２．４ |
| 12 | 慨嘆 | 1 | ２．４ |
| 12 | 要求 | 1 | ２．４ |
| 12 | 助言・忠告 | 1 | ２．４ |
| | 総　　計 | ４２ | １００．２ |

表４：「心内対自」の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 自己納得 | １６ | ４２.１ |
| 2 | 独白 | １３ | ３４.２ |
| 3 | 註釈 | 3 | 7.9 |
| 3 | 観察 | 3 | 7.9 |
| 5 | 希望 | 1 | 2.6 |
| 5 | 主張 | 1 | 2.6 |
| 5 | 疑問 | 1 | 2.6 |
| | 総　　計 | ３８ | ９９.９ |

表とは論述の順序が前後するが、表４「心内対自」では、その下位項目の中で「自己納得」(42.1%) と「独白」(34.2%) が計76.3%を占めており、作品内世界の登場人物「私」の対自的自己活動が殆ど（これに「観察」7.9%を加えるとさらにその比率は増す）で、形式的には「私」が語ってはいるが、その意識は何よりもまず語る「私」に再帰しており、文脈上相手＝作品内世界外の読者を強く意識しているものではない。また、その他の例も「希望」(2.6%)、「主張」(2.6%)、「疑問」(2.6%) と、登場人物「私」の作品内世界の心象・言説を表すものであって、読者を意識しているものは「註釈」(7.9%) のみであると言ってよく、メイナードの結論と完全には合致しない。

これに対して、表３「心内文脈内他者」の下位項目を見てみると、「説明」(14.3%)、「非難」(11.9%)、「依頼」(11.9%)、「同意要求」(9.5%)、「提案」(9.5%)、「主張」(7.1%)、「疑問」(4.8%)、「問いかけ」(4.8%) といった登場人物「私」の対他者的自己活動が73.8%を占めている。これにさらに、「要求」(2.4%) と「助言・忠告」(2.4%) を加えると、８割弱の比率に達する。このことは、カテゴリーの分け方からすれば当然ではあるが、登場人物「私」が作品内世界の「他者」を語りかける相手として意識していることを明確に表している。ただ、それがメイナードの言うように読者をそこに含み得るのかについては必ずしも明らかではない。

むしろ、これらの大部分は、作品内世界の登場人物「私」が、自己、及び他者と関わることで独自の物語世界を構築する機能を表すものであり、これら二つ（＝「心内対自」と「心内文脈内他者」）の二つのカテゴリーで全130例の61.5%を占めている。これに、同様に自己言及性を表す「対自」

3例、文脈内他者に関わる「文脈内他者発話」2例、及び「文脈内他者」1例を含めれば、それらは86例（66.2%）になる。

これらから、「だ・である」体に「です・ます」体が混用される事例は、6割強が、読者を意識していると言うよりは作品内世界に於いて自己言及的に、あるいは他者言及的に“語る「私」”が一定の関係を構築する働きをしていると言った方が適切であり、メイナードが〈語り手－読者〉の関係に重点を置いたために意識しなかった作品内世界の構造がここに示されている。そこで明らかになったものは、語り手の存在感というよりは、登場人物「私」を軸に作られる作品内世界の「関係性」－場合によっては作品内世界そのもの－であると言うことができる。

これらに対して、残りを占める「対読者」のカテゴリーの下位構造を見てみると、「同意要求」(36.4%)、「依頼」(9.1%)、「提案」(4.5%)、「問いかけ」(4.5%)、「主張」(2.3%)、「謝罪」(2.3%)、「助言・忠告」(2.3%)、「注意喚起」(2.3%) という、書き手が何らかの形で働きかけを行うものが63.7%を占めており、その他は、「註釈」(22.7%)、「説明」(13.6%) といった－勿論読者に対して述べているものではあるけれども－書き手が自分の書いたことに自己言及的に関わり提示するものが36.3%となっている。言い換えれば、「対読者」と言いながら、登場人物「私」の意識が100%読者に向いているだけのものではなく、特に「註釈」や「説明」といった、前文から「対読者」の「です・ます」体へ、という流れに於いては、自己の活動を客体化する手続きを経て読者に提示するという複雑な構造が存在することが明らかとなる。

このように、「対読者」のカテゴリーは大きく二分されており、このうち前者（＝63.7%）のグループのものは、登場人物「私」の対他者的自己活動であり、後者が自己言及的客体化を含む活動であるが、この場合の他者こそが、作品内世界を受容する読み手であり、書き手が作品内世界の外部として意識している部分である。ここに至って漸くメイナードが主張する「語り手の存在を意識する」局面が現れてくるのであり、このことからメイナードの考察は、混用のごく一部の局面だけを切り取って明らかにしたものであることが解る。

以上に見た大きな三つのカテゴリーの中で「心内文脈内他者」は、下位項目が最多の「説明」でも14.3%で、以下「非難」と「依頼」の11.9%から最少の5項目2.4%まで16項目にわたって比較的緩やかに各項目の出現

比率が低減化しつつ分布するのに対し、「心内対自」と「対読者」は、その下位項目が「心内文脈内他者」ほどには多数に分岐せず、また少数の下位項目が突出する傾向が見られる。「心内対自」では「自己納得」と「独白」に、「対読者」では「同意要求」と「注釈」に集中する。このことは、登場人物「私」の指向性が作品内世界の自己と作品内世界外存在の他者＝読者の場合には、「機能・含意」がかなり限定されるのに対し、作品内世界の他者＝「私」以外の登場人物に対する場合には、そこ（＝作品内世界）で構築される人間関係によって多様な顕れ方を示すことを明らかにしている。

以上の分析をまとめると；

①.「だ・である」体への「です・ます」体の混用は、９割強が作品内世界の登場人物「私」の指向性を表す。

②.「私」の指向性は、読者、文脈内他者、自己の三者でほぼ均等に分かれるが、このことから多く（６割強）は、対他的指向性を表す。

③. 他方、この「私」の指向性の「機能・含意」は何よりも作品内世界に於いて「私」を軸とした関係性を構築するものとなっている。

④.「です・ます」体の「機能・含意」は作品内世界の他者に指向性が向けられる場合、その内実は作品内世界の「私」と他者の関係性によって多様な出現形態を採る。

これらが本章の考察から得られた知見である。

## 5. 分析・考察⑵－「です・ます」体の前文から－

本章に於いては、「です・ます」体の前にどのような文が現れているかを見ることにする。前章が「です・ます」体自体の数量的なデータであって、謂わば静的な考察であったのに対し、本章は、どのような先行状況を踏まえて「です・ます」体が出現するかを明らかにしようとする動的な面での考察である。

表５：「です・ます」体の前文の「機能・含意」一覧（全体）

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 事実 | ３５ | ２６.９ |
| 2 | 判断 | １９ | １４.６ |
| 3 | 文脈内他者発話 | １５ | １１.５ |
| 4 | 説明 | １３ | １０.０ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 5 | 主張 | 9 | 6.9 |
| 6 | 意志 | 4 | 3.1 |
| 7 | 依頼 | 3 | 2.3 |
| 7 | 感動詞 | 3 | 2.3 |
| 9 | 希望 | 2 | 1.5 |
| 9 | 結論 | 2 | 1.5 |
| 9 | 心内自己発話 | 2 | 1.5 |
| 9 | 推量 | 2 | 1.5 |
| 9 | 独白 | 2 | 1.5 |
| 14 | 仮説 | 1 | 0.8 |
| 14 | 疑問 | 1 | 0.8 |
| 14 | 他者発話 | 1 | 0.8 |
| 14 | 註釈 | 1 | 0.8 |
| 14 | 伝聞 | 1 | 0.8 |
| 14 | 問いかけ | 1 | 0.8 |
| 14 | 同意要求 | 1 | 0.8 |
| 14 | 非難 | 1 | 0.8 |
| 14 | 要求 | 1 | 0.8 |
| 14 | 理由 | 1 | 0.8 |
| 24 | 無し(段落冒頭) | 9 | 6.9 |
| | 総　　計 | 130 | 100 |

全130例の前文は、表5の通り、「事実」(26.9%) が最も多く、以下「判断」(14.6%)、「文脈内他者発話」(11.5%)、「説明」(10.0%) と続き、これらで62.9%と全体のほぼ6割を占めている。興味深いのは、「主張 (=全て登場人物「私」の)」(6.9%)、「意志」(3.1%)、「依頼」(2.3%)、「感動詞」(2.3%)、「希望」(1.5%)、「結論」(1.5%)、「心内自己発話」(1.5%)、「推量」(1.5%)、「独白」(1.5%)、「疑問」(0.8%)、「問いかけ」(0.8%)、「同意要求」(0.8%)、「非難」(0.8%)、「要求」(0.8%) といった登場人物「私」の心の働きを表す表現や相手 (=作品内世界の人物、読者を問わず) に対する働きかけを表す表現は、「主張」を除けば軒並み出現比率が少なくなっていることである。勿論、これらの合計が残りの30%強を占める訳ではあるが、個々の「機能・含意」が占める比率は小さい。これに対して、比率の多い「事実」、「判断」、「説明」といった内容は、作品内世界の登場人物「私」にとって、何らかの意味で客観的な様相を含んでいるも

のであることが解る。また、「文脈内他者発話」は、「他者」という、登場人物「私」から見て明らかに客体の立場に立つものから為されるものである。ここから、「です・ます」体が重点とする「機能・含意」は、先行する何らかの「事実」や「判断」、「説明」など比較的客観的な性格を帯びたものや、「文脈内他者発話」という、登場人物「私」から見て客体的なものからの影響を受けた現れ、即ち作品内世界に於ける客観的なものごとに対する登場人物「私」＝作品内世界の主体からの“反応”であると言うことができる。

そして、残りの30％強が、登場人物「私」からの心の働きや相手に対する働きかけを表すとすれば、その後に続く「です・ます」体の文との間では「私」の主体的情動、あるいは行為の連続性が成り立っていると言える。このように考えた時、「です・ます」体は、作品内世界に於いて作者（書き手）の作品内の語り手（＝登場人物「私」）の対他者的表現活動に用いられるか、語り手（発話者）の即自的な－取りあえず働きかける相手を括弧に入れた形での－情動的表現活動に用いられるか、のいずれかを表すものであると結論づけられる。メイナード（2000：341）が「語り手を意識させる」と述べたことが、その内実は、実はそれほど単純なものではなく、その中にさらに語り手の複数のあり方、あるいは述べ方を含んでいるということが重要となってくるのである。

そして、ここではむしろ野田が挙げた「主張文」と「伝達文」との対応が意識されることになる。前者＝作品内世界の主体からの“反応”はより「伝達文」に近く、後者＝作品内世界の主体の即自的な情動的表現活動はより「主張文」に近いと解釈できるであろう。

これらの前文をさらに各カテゴリーの下位構造ごとに示したものが以下の諸表６～11である。

表６：「対読者」の前文の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 事実 | １１ | ２５．０ |
| 2 | 説明 | 9 | ２０．５ |
| 3 | 判断 | 5 | １１．４ |
| 4 | 主張 | 3 | ６．８ |
| 4 | 意志 | 3 | ６．８ |
| 6 | 仮説 | 1 | ２．３ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 6 | 心内自己発話 | 1 | 2.3 |
| 6 | 希望 | 1 | 2.3 |
| 6 | 依頼 | 1 | 2.3 |
| 6 | 理由 | 1 | 2.3 |
| 6 | 伝聞 | 1 | 2.3 |
| 6 | 結論 | 1 | 2.3 |
| 6 | 註釈 | 1 | 2.3 |
| 14 | 無し(段落冒頭) | 5 | 11.4 |
| | 総　　計 | 44 | 100.3 |

表7：「心内文脈内他者」の前文の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 判断 | 7 | 16.7 |
| 2 | 事実 | 6 | 14.3 |
| 2 | 文脈内他者発話 | 6 | 14.3 |
| 4 | 主張 | 5 | 11.9 |
| 5 | 説明 | 4 | 9.5 |
| 6 | 感動詞 | 2 | 4.8 |
| 6 | 依頼 | 2 | 4.8 |
| 8 | 他者発話 | 1 | 2.4 |
| 8 | 結論 | 1 | 2.4 |
| 8 | 希望 | 1 | 2.4 |
| 8 | 問いかけ | 1 | 2.4 |
| 8 | 要求 | 1 | 2.4 |
| 8 | 疑問 | 1 | 2.4 |
| 8 | 同意要求 | 1 | 2.4 |
| 8 | 非難 | 1 | 2.4 |
| 8 | 心内自己発話 | 1 | 2.4 |
| 8 | 無し(段落冒頭) | 1 | 2.4 |
| | 総　　計 | 42 | 100.3 |

表8：「心内対自」の前文の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 事実 | 14 | 36.8 |
| 2 | 判断 | 6 | 15.8 |
| 2 | 文脈内他者発話 | 6 | 15.8 |
| 4 | 文脈内自己発話 | 2 | 5.3 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 4 | 推量 | 2 | 5.3 |
| 4 | 独白 | 2 | 5.3 |
| 7 | 意志 | 1 | 2.6 |
| 7 | 主張 | 1 | 2.6 |
| 7 | 感動詞 | 1 | 2.6 |
| 10 | 無し(段落冒頭) | 3 | 7.9 |
| | 総　　計 | 38 | 100.0 |

表9：「対自」の前文の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 事実 | 2 | 66.7 |
| 2 | 判断 | 1 | 33.3 |
| | 総　　計 | 3 | 100.0 |

表10：「文脈内他者発話」の前文の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 事実 | 1 | 50.0 |
| 1 | 文脈内他者発話 | 1 | 50.0 |
| | 総　　計 | 2 | 100.0 |

表11：「文脈内他者」の前文の「機能・含意」一覧

| 順位 | 機能・含意 | 出現数 | 出現率(%) |
|---|---|---|---|
| 1 | 事実 | 1 | 100.0 |
| | 総　　計 | 1 | 100.0 |

これらの表を見ると、下位構造を構成する項目には大きく以下のような特徴が認められる。

a．「心内文脈内他者」、「対読者」、「心内対自」、「対自」、「文脈内他者発話」、「文脈内他者」の順で下位項目の総数が減少していくが、これは主に、特に上位の三つのカテゴリー内で「主張」、「依頼」、「希望」、「問いかけ」、「要求」、「疑問」、「同意要求」、「非難」、「意志」といった、他者に対する何らかの働きかけを示す前文の出現状況によっており、上記の順序でこれらが減少していく。

b．「事実」、「判断」が上位三つのいずれのカテゴリーでも高い比率を示すが、「心内文脈内他者」と「対読者」のカテゴリーには多く現れている「説明」が「心内対自」のカテゴリーには現れていない。

c．逆に、「心内文脈内他者」と「心内対自」のカテゴリーに現れる「文脈内他者発話」が「対読者」のカテゴリーには現れていない。

d．少数カテゴリーの「対自」、「文脈内他者」、「文脈内他者発話」でも「事実」と「判断」が優勢であり、その他の前文は、「文脈内他者発話」に同じく「文脈内他者発話」が先行する＝他者の語りが作品内で継続する一例のみである。

aに関して、上位三つのカテゴリーから働きかけを表す下位項目をカテゴリー毎に取り出してみるとその比率は「心内文脈内他者」では31.1％、「対読者」では18.2％、「心内対自」では5.6％である。このことが示すのは、「心内文脈内他者」がその前文の多様な働きかけに対する呼応として［働きかけ→受容→文脈内他者に対するコメント］という形で作品内世界に最も緊密な人間関係を構築・維持しているということであり、それは語り手が読者を意識しているはずの「対読者」のカテゴリーよりも強いことが解る。

これに対して、bを考えてみると、「心内対自」は、働きかけの表現が前文に少ないだけでなく、（対自も含めて）「説明」が現れていないことがその性格をよく表していると言える。「説明」とは何事かを客体化した上で他者に向けて表出する（＋分からせる）ことであるが、その表出を含意しないで客体化する働き（「事実」や「判断」も含めて）すらもが自己内の事柄として留まり、［前文→「です・ます」体］の間は、自己内での活動として連続体を為しているのである。このことは、「心内対自」のカテゴリーの前文に「説明」が現れないだけでなく、ここにしか現れない下位項目「独白」が出現していることによっても傍証される。

残るcの「対読者」カテゴリーの特徴を考えてみると、ここには作品内世界の極めてユニークな構造が看て取れると言ってよい。「対読者」カテゴリーは、上述のように「文脈内他者発話」を下位項目として含まない。「文脈内他者発話」は作品内世界に於いて他者が登場人物「私」と関わろうとする言語行為であるが、それが見られないということは、作品内の他者の発話を「私」がまず受容するという活動がなく、客体化されたものを直ちに読者に発信したり、働きかけを行ったりするものとなっている。このことは、作品（ここでは小説とエッセイに限られるが）というものが、読者を意識する際には、作品内に他者が存在していたとしてもそれ／その発言内容を対象としたり顧慮したりすることなく、作者あるいは登場人物

「私」の世界を直接読者に伝えるという構造を持って存立していることを表している。別言すれば、何らかの他者の発言を取り上げてそれについていきなり読者に問いかけるような叙述構造（作例：「この馬鹿野郎！」みなさん、この発言どう思います？）が存在しない、ということであり、謂わば作者あるいは登場人物「私」は、読者と直接に関わりながら、[作者あるいは登場人物「私」－読者] という協働的な世界をより大きな文脈として構築しようとしているのである。

以上の分析・考察を通して明らかとなったことをまとめるならば；

⑤. 「です・ます」体は、登場人物「私」＝作品内世界の主体からの“反応”である

⑥. それは、作品内世界に於いて対他者的表現活動に用いられるか、語り手（発話者）の即自的な情動的表現活動に用いられるか、のいずれかである。

⑦. 前章の結論と同様に登場人物「私」を軸とした関係性を構築するものとなっているが、その範囲は作品外世界にも広がる。

⑧.「です・ます」体は、作品内他者との関係性をより緊密にする機能を有する一方、登場人物「私」の固有世界も強固なものにする。

⑨.「です・ます」体は、作者が読者を意識する場合には作品内世界の他者が顧みられなくなり、作者と読者による協働的な作品世界を成立させる。

以上が本章の考察から得られた知見であり、「だ・である」体に「です・ます」体が混入する混用の特徴は、ここまでに挙げた９点に集約することができる。

## 6. まとめ

以上のように「です・ます」体が「だ・である」体に混用される場合の特徴を見てきたが、そこで明らかになったことを一言で言うならば、それは「です・ます」体混用の文脈形成機能である。それは、メイナードや野田が考察したよりも一層複雑な機構を持ち、作品の存立そのものを支える面すらあることが分かった。中村（2011）と合わせて考えると、混用という現象は、「です・ます」体に「だ・である」体が混用する場合とその逆とでは、単純に性質や機能が逆転していると言うよりは、別物と言ってよいほど異なっていることも明らかとなったと言える。前者の場合には、よ

り統語的・構造的な特徴となって現れ得るが、後者の場合にはそうした特徴よりも作品内世界の関係性（の強弱）といった面が極めて強く関わっていることが明らかとなった。こういった複雑な内容を持つ混用を、メイナードが提唱するように、外国人学習者に対する指導項目とするかどうかは、中村（2011）でも触れたが、やはり慎重に検討されねばならないものであることを再度述べた上で小論を終わることとしたい。

## 参考文献

中村重穂（2011）「文体混用に関する一考察－「だ・である」体の「です・ます」体への混用について－」『北海道大学留学生センター紀要』第15号　北海道大学国際本部留学生センター　pp.20-39

野田尚史（1998）「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『國語學』第194集　国語学会　pp.89-102

メイナード・K・泉子（1991）「文体の意味－ダ体とデスマス体の混用について－」『月刊言語』1991年２月号　大修館書店　pp.75-80

メイナード・K・泉子（2000）『情意の言語学－「場交渉論」と日本語表現のパトスー』くろしお出版

## 資料原典

（（ ）内は【資料】出典欄の略号）

伊集院憲弘（2007）『客室乗務員は見た！』新潮社（客）／井上ひさし（1987）『自家製文章読本』新潮社（自）／井上ひさし（1997）『私家版日本語文法』新潮社（私）／内田幹樹（2007）『機長からアナウンス』新潮社（機）／川島誠（2002）『800』角川書店（800）／桜庭一樹（2008）『赤×ピンク』角川書店（赤）／柴田よしき（2009）『ワーキング・ガール・ウォーズ』新潮社（ワ）／千石涼太郎（2007）『なまら北海道だべさ！！』双葉社（な）／原田宗典（1997）『見学ノススメ』講談社（見）／原田宗典（1994）『日常ええかい話』集英社（日）／誉田哲也『疾風ガール』光文社（疾）

なかむら　しげほ（留学生センター准教授）

【資料】

| No. | 引　　用 | 相　　手 | 機能・含意 | 前　　文 | 出典・ページ |
|---|---|---|---|---|---|
| 89の1 | 聞こえません、聞こえません。 | 心内・対自 | 独白 | 事実 | 赤102 |
| 89の2 | なにもわかりません。 | 心内・対自 | 独白 | 事実 | 赤102 |
| 90 | ～お思いになりませんか。 | 対読者 | 問いかけ | | 自137 |
| 91の1 | ～わけではりません。 | 対読者 | 説明 | 意志 | 私94 |
| 91の2 | ～仕掛けることができないのです。 | 対読者 | 説明 | 説明 | 私94 |
| 92 | ～竹槍を担ぎ出すものですか。 | 心内・文脈内他者 | 意志 | 事実 | 私110 |
| 93 | ～他所へ引っ越したくなりました。 | 心内・対自 | 希望 | | 私148 |
| 94 | ～賑わいと思ってください。 | 対読者 | 依頼 | 仮説 | 私205 |
| 95 | 慣れたから平気、ですか。 | 心内・文脈内他者 | 自己納得 | 他者発話 | 客66 |
| 96の1 | ～観察されているのがキャビンです。 | 対読者 | 説明 | 説明 | 客142 |
| 96の2 | ～ですかね。 | 対読者 | 同意要求 | 説明 | 客143 |
| 97 | ……たいしたことないでしょう？ | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 機83 |
| 98 | ～あなたも知らなかったでしょう？ | 対読者 | 問いかけ | 結論 | 機225 |
| 99 | ～しちゃうもんねなのだですたい。 | 心内・対自 | 独白 | 意志 | 日144 |
| 100 | ～穿くようなやつ、あるでしょ。 | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 日178 |
| 101 | ～ちょっと興味あるところでしょ？ | 対読者 | 同意要求 | 意志 | 日201 |
| 102 | たいへんそうでしょ。 | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 日208 |
| 103 | ～もらってみては如何でしょう。 | 対読者 | 提案 | 伝聞 | 見13 |
| 104 | ～方がよろしいですぞ。 | 対読者 | 助言・忠告 | 事実 | 見63 |
| 105 | ～勉強になりました～(倒置) | 心内・対自 | 自己納得 | 判断 | 見83 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 106 | ～とぐろを巻いている例のアレですね。 | 対自 | 自己納得 | 判断 | 見169 |
| 107 | ～皆さん、すみません。 | 対読者 | 謝罪 | 判断 | 見203 |
| 108 | ～なんと申しましょうか、～ | 心内・対自 | 註釈 | | 見232 |
| 109 | ～企画部第二企画課、ですって？ | 心内・対自 | 独白 | 事実 | ワ60 |
| 110の1 | ～変更させていただきます。 | 文脈内他者発話 | 説明 | 事実 | ワ66 |
| 110の2 | ～対象にもさせていただきますよ。 | 文脈内他者発話 | 説明 | 文脈内他者発話 | ワ66 |
| 111 | ～何とかしなさいよ、自分で。(倒置) | 心内・文脈内他者 | 要求 | 判断 | ワ66-67 |
| 112の1 | ～沖縄に行くつもりであったのです。 | 心内・対自 | 独白 | 主張 | ワ161 |
| 112の2 | ～送ってもらっていたのでした。 | 心内・対自 | 独白 | 独白 | ワ161 |
| 112の3 | しますかね、そういうの。(倒置) | 心内・対自 | 独白 | 事実 | ワ161 |
| 112の4 | いきなりですよ。 | 心内・対自 | 独白 | 独白 | ワ161 |
| 113 | ～手はないでしょう、実際。(倒置) | 心内・対自 | 独白 | 判断 | ワ164 |
| 114 | 申告するものはありません。 | 文脈内他者 | 説明 | 事実 | ワ170 |
| 115の1 | ～一緒にされても困るわけです。 | 心内・文脈内他者 | 結論 | 主張 | ワ173 |
| 115の2 | ～日本語はそうではありません。 | 心内・文脈内他者 | 説明 | 結論 | ワ173 |
| 115の3 | ～けっこう大変なんです。 | 心内・文脈内他者 | 説明 | 説明 | ワ173 |
| 116の1 | 誤解なんです。 | 心内・文脈内他者 | 説明 | | ワ175 |
| 116の2 | ただの誤解なんですけどね。 | 心内・文脈内他者 | 説明 | 説明 | ワ175 |
| 117 | そりゃ燃え上がるでしょうね。 | 心内・対自 | 自己納得 | 事実 | ワ176 |
| 118 | ～バカンスがあるんです。 | 心内・対自 | 主張 | 事実 | ワ178 |
| 119 | ～決着をつけましょうね、～(倒置) | 心内・文脈内他者 | 助言・忠告 | 事実 | ワ179 |
| 120 | ちょっとしたものでしょう？ | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 80013 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 121 | ～私的な感じがするでしょう？ | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 80020 |
| 122 | ちょっと素敵でしょ。 | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 80040 |
| 123 | ～走るのっていやでしょ。 | 対読者 | 同意要求 | 意志 | 80051 |
| 124の1 | え、ふたりで七ならべですか。 | 心内・文脈内他者 | 問いかけ | 文脈内他者発話 | 80057 |
| 124の2 | よしましょうよ、先輩。 | 心内・文脈内他者 | 提案 | 問いかけ | 80057 |
| 125 | ～いいスポーツでしょう？ | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 80060 |
| 126 | ～そんなもんでもないでしょ。 | 対読者 | 同意要求 | 主張 | 80096 |
| 127 | ～ばかげてるでしょう？ | 対読者 | 同意要求 | 主張 | 800131 |
| 128 | ～やってたことが出てくるでしょ？ | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 800140 |
| 129 | ～埋めつくされてるでしょ。 | 対読者 | 説明 | | 800146 |
| 130 | ～もう充分に謹慎ものでしょ。 | 心内・対自 | 自己納得 | 事実 | 800161 |
| 131 | ～存在しているわけでしょう？ | 対読者 | 同意要求 | 主張 | 800170 |
| 132 | ～買えなくなっちゃうでしょおが。 | 心内・文脈内他者 | 主張 | 主張 | 800220 |
| 133 | ～もうそのギャグ知ってますよお。 | 心内・文脈内他者 | 主張 | 文脈内他者発話 | 800231 |
| 134 | ～嫌いな奴も交じってますが。 | 心内・対自 | 註釈 | 判断 | 疾25 |
| 135の1 | そりゃそうでしょう。 | 心内・対自 | 自己納得 | 文脈内他者発話 | 疾30 |
| 135の2 | そりゃ嬉しいでしょう。 | 心内・対自 | 自己納得 | 推量 | 疾30 |
| 136 | ジーパンは残ってました。 | 心内・文脈内他者 | 主張 | 判断 | 疾31 |
| 137 | ～ぶらぶらしてるんでしょうか。 | 心内・対自 | 疑問 | 事実 | 疾34 |
| 138 | さすがです。 | 心内・対自 | 自己納得 | 事実 | 疾42 |
| 139 | ～ぶっ飛ばすだけですよ。 | 心内・対自 | 独白 | 判断 | 疾42 |
| 140 | アンニュイ、というんでしょうか～(倒置) | 心内・対自 | 註釈 | 事実 | 疾59 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 141の1 | 間違いでした。 | 心内・文脈内他者 | 説明 | 文脈内他者発話 | 疾85 |
| 141の2 | ～働けないんでした。 | 心内・文脈内他者 | 結論 | 説明 | 疾85 |
| 142 | 宮原、急に真顔になりましたよ。 | 心内・対自 | 観察 | 文脈内他者発話 | 疾91 |
| 143 | ～いかがなもんでしょう。 | 心内・文脈内他者 | 慨嘆 | 判断 | 疾95 |
| 144 | バカでしょ。 | 心内・対自 | 自己納得 | 判断 | 疾152 |
| 145 | ～馴れ馴れしくないですか。 | 心内・文脈内他者 | 非難 | 事実 | 疾158 |
| 146 | ～寝れば元気になるでしょう。 | 心内・対自 | 独白 | 文脈内他者発話 | 疾185 |
| 147 | ～持ってった方がいいでしょう。 | 心内・対自 | 独白 | 事実 | 疾185 |
| 148 | ～仕方ないでしょう。 | 心内・文脈内他者 | 独白 | 文脈内他者発話 | 疾213 |
| 149の1 | 宮原、また黙っちゃいましたよ。 | 心内・対自 | 観察 | 感動詞 | 疾214 |
| 149の2 | ～いってないでしょうが。 | 心内・文脈内他者 | 同意要求 | 感動詞 | 疾214 |
| 150 | あり得ないでしょう、東京では。(倒置) | 対読者 | 同意要求 | 事実 | 疾215 |
| 151 | ～興味ないからツッコミません。 | 心内・文脈内他者 | 独白 | 判断 | 疾216 |
| 152 | ～晴れてることくらい知ってましたよ。 | 心内・対自 | 自己納得 | 事実 | 疾216 |
| 153の1 | ～とか思ってるんでしょう。 | 心内・文脈内他者 | 非難 | 判断 | 疾216-217 |
| 153の2 | でもそれはズルイでしょう。 | 心内・文脈内他者 | 非難 | 非難 | 疾217 |
| 154 | ～なんか有益な情報がほしいでしょう。 | 心内・文脈内他者 | 提案 | 事実 | 疾218 |
| 155 | ～午前十時四十分ですが。 | 心内・文脈内他者 | 註釈 | 事実 | 疾219 |
| 156 | ～詳しくうかがいましょうか。 | 心内・文脈内他者 | 疑問 | 感動詞 | 疾228 |
| 157 | ～悪いホテルじゃないっすよ。 | 心内・対自 | 自己納得 | | 疾253 |
| 158 | 宮原、絶句しております。 | 心内・対自 | 観察 | 文脈内自己発話 | 疾256 |
| 159 | ～ありゃありゃでございます。 | 心内・文脈内他者 | 非難 | 文脈内他者発話 | 疾286 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 160 | うわ、想像できすぎて怖いっす。 | 心内・対自 | 自己納得 | 文脈内他者発話 | 疾288 |
| 161 | ～なにげに怖いんですけど。 | 心内・対自 | 独白 | 文脈内他者発話 | 疾290 |
| 162の1 | そうでしょう。 | 心内・対自 | 自己納得 | 文脈内他者発話 | 疾291 |
| 162の2 | そうでしょうとも。 | 心内・対自 | 自己納得 | 文脈内自己発話 | 疾291 |
| 163 | キャラっつーんですか、違うんだよね。 | 心内・対自 | 自己納得 | 判断 | 疾292 |
| 164の1 | ～気持ちよくいただきましょうよ。 | 心内・文脈内他者 | 同意要求 | 判断 | 疾295 |
| 164の2 | ～大人ってわけじゃないでしょうが。 | 心内・文脈内他者 | 非難 | 同意要求 | 疾295 |
| 165 | ～よく分かんないんですけど。 | 心内・文脈内他者 | 疑問 | 文脈内他者発話 | 疾347 |
| 166 | ～真っ白にして差し上げますわよ。 | 心内・文脈内他者 | 意志 | 心内自己発話 | 疾370 |
| 167の1 | うん、でしょ？ | 心内・文脈内他者 | 同意要求 | 疑問 | 疾371 |
| 167の2 | ～撮ろうとしたでしょ。 | 心内・文脈内他者 | 問いかけ | 要求 | 疾371 |
| 168 | (ちょっと、いい過ぎました。) | 対読者 | 註釈 | 理由 | な27 |
| 169 | (そんは[ママ]感じの外観なんです) | 対読者 | 註釈 | | な31 |
| 170 | そこで出ました～(倒置) | 対読者 | 説明 | 説明 | な34 |
| 171 | (これ、北海道だけだと思います) | 対読者 | 註釈 | 説明 | な36 |
| 172の1 | ～聞かないでください。 | 対読者 | 依頼 | 心内自己発話 | な37 |
| 172の2 | ただなんとなくですから。 | 対読者 | 註釈 | 依頼 | な37 |
| 173 | ～乗りすぎてはいけないですね。 | 心内・対自 | 自己納得 | 事実 | な42 |
| 174 | ～上品にお願いします。 | 心内・文脈内他者 | 依頼 | 主張 | な54 |
| 175 | そうですよね？中高年のみなさま！ | 対読者 | 同意要求 | 註釈 | な63 |
| 176 | ～考えていただけないでしょうか？ | 心内・文脈内他者 | 同意要求 | 主張 | な71-72 |
| 177 | (駄洒落ですみません) | 対読者 | 註釈 | 判断 | な87 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 178 | ～みなさんは覚えておいてください。 | 心内・文脈内他者 | 依頼 | 判断 | な96 |
| 179 | ～こういうの好きですね。 | 対自 | 自己納得 | 事実 | な123 |
| 180 | (～バカにしているわけではありません) | 対読者 | 註釈 | 判断 | な132 |
| 181 | ～全部自腹でお願いします。 | 心内・文脈内他者 | 依頼 | 事実 | な148 |
| 182 | (パーマは「半永久」という意味です) | 対読者 | 註釈 | | な154 |
| 183 | ～つけてこないよう、お願いします。 | 対読者 | 依頼 | 説明 | な159 |
| 184 | ～ことがわかってうれしいんです。 | 心内・対自 | 自己納得 | 事実 | な171 |
| 185 | (森さんはいろいろ大変ですね) | 心内・対自 | 自己納得 | 推量 | な172 |
| 186 | ～待っていると思いますよ、男性諸君！ | 対読者 | 主張 | 説明 | な175 |
| 187 | チャンスがあったら、聴いてください。 | 対読者 | 依頼 | 判断 | な178 |
| 188 | (ファンヒーターともストーブとも呼びます) | 対読者 | 註釈 | | な190 |
| 189 | ～手が出せない値段なんです。 | 対読者 | 説明 | 希望 | な201 |
| 190 | (言葉で説明しても分からないですね) | 対読者 | 註釈 | 事実 | な210 |
| 191 | ～トイレはキレイにつかいましょうね。 | 対読者 | 注意喚起 | 説明 | な212 |
| 192 | (京都人も好きですけどね) | 対読者 | 註釈 | 説明 | な213 |
| 193 | そこも北海道のいいところですね。 | 対自 | 自己納得 | 事実 | な216 |
| 194 | いかがなもんでしょう、考えてみてください。 | 心内・文脈内他者 | 依頼 | 主張 | な218 |
| 195の1 | ～通勤通学のバスのなかみたいでした。 | 心内・文脈内他者 | 状況説明 | 依頼 | な218 |
| 195の2 | ～増やしていただけないもんでしょうか？ | 心内・文脈内他者 | 依頼 | 状況説明 | な218 |
| 195の3 | ～いう手もあるかと思います。 | 心内・文脈内他者 | 提案 | 依頼 | な218 |
| 196 | ～なんてのはいかがでしょうか？ | 心内・文脈内他者 | 提案 | 希望 | な229 |
| 197 | ～のんびり眺めてはいかがでしょうか。 | 対読者 | 提案 | 判断 | な240 |

Journal of the International Student Center Hokkaido University No.16 (2012)

# A study on stylistic mixture (Ⅱ):
## mixture of formal style sentences into abrupt style sentences

NAKAMURA, Shigeho

This study analyzes cases of stylistic mixture of formal style (desu/masu) sentences into abrupt style (da/dearu) sentences and classifies them functionally and from a viewpoint of discourse-building. Based on the analysis, it was found that the mixture of formal style sentences basically indicates directivity of "I", the character in the story, and its directivity is a response from "I." As well, over 60% of this directivity is concentrated into others, and it is discovered that the directivity of formal style functions as a connective of "I" with others to build a relationship in the world of a story. Moreover, by the consideration on a sentence before formal style, it has a function to build the relationship also on the world outside the story in cooperation with a reader of this story.

Based on these considerations, it can be concluded that stylistic mixture of formal style (desu/masu) sentences into abrupt style (da/dearu) sentences is different from stylistic mixture of abrupt style sentences into formal style sentences.